2022年６月 19 日 礼拝メッセージ

「ここで何をしているのか」　　岡嶋千宙伝道師

聖書 列王記 上 19 章 8-15 節

先週日曜日、礼拝のあと、教会員を含めた地域の方たちと、京セラドームに野球観戦に行ってきました。オリックス対タイガースの関西ダービーです。わたしが所属している教会、向島伝道所には、障害を持っている人が多く集っています。単独での外出が難しい方たちが多く、みんなで集った礼拝の後に、一緒に食事をしたり、お出掛けしたりする機会を設けるようにしています。先週の野球観戦は、そんなお出掛けイベントの一つ。過去２年間はコロナ禍の影響で実施できなかったのですが、３ 年ぶりにようやく行くことができました。阪神のガンケル投手の好投、佐藤輝明選手の特大ホームランなど、見どころたくさん。特に印象深かったのは、元阪神で、今はオリックスに所属している能見選手が、３ 人目の投手としてマウンドに上がったときです。オリックスだけではなく、阪神のファンからも大きな歓声と拍手が起こり、その光景に心があたたかくなりました。試合結果は、京セラドームを本拠地とするオリックスの大敗。特に野球が好きというわけではなく、勝敗にこだわりはないのですが、快晴の日に、見どころたくさんの試合を、久しぶりに教会の人たちと共に楽しめたことで、充実した時を過ごすことができました。次の日、月曜日。日曜日はあんなに天気がよかったのに、曇り空になり、火曜日には近畿地方が梅雨入りしました。教会の大きなイベントを終えてほっとしていたところに天候の急激な変化があり、疲れが出ています。身体的にも精神的にも下りぎみ。１ 日だけ、いや、半日でもいいから、誰の目にも触れることのない場所で、一人ゆっくりとしたいなーと思ったり。何か大きなことをなした後、環境の変化などが重なり、心身共に疲れが出る、というのは、いつの時代も同じようです。その規模も、重さも、大きく異なりますが、本日の御言葉に登場する人物も、疲れ果てた一人です。

列王記上 17 章 1 節で「ギレアドの住民、ティシュベ人」と紹介されているエリヤ。列王記下 1 章 8 節には「毛衣を着て、腰には革帯をしめている」とありますが、それ以外、例えば、聖書の人物にありがちな父親は誰か、などの家系図、あるいは服装以外の外見についての描写は一切ありません。人物像についての描写が少ない、このエリヤ、実はとってもすごい人なのです。何がすごいかと言うと、例えば、①神の言葉を聴き、神と語り合う（列王上 17:2-9 など）。②食べ物を増やす（列王上 17:10-16）。③死んだ人を生き返らせる（列王上 17:17-24）。④天から炎を降らせることにより、人々が現実に見える形で神の存在を知らせる（列王上 18:20-39）。⑤天候の変化を予測し、雨を降らせる（列王上 17:14、18:14-46）。神の言葉を聴いて神と語り合う、ということなら、預言者なのでしょうが、それ以外のこと、死んだ人を生き返らせるということなどは、預言者以上の存在。そういえば、わたしたちはエリヤと似たような人を知っています。そう、イエスです。だ

からでしょう。旧約だけではなく、新約でも、複数の箇所でエリヤについての言及がなされています。しかも、ただ言及されているだけではなく、イエスの語りの中でエリヤのことが述べられ、さらに、イエスの 3 人の弟子（ペトロ、ヤコブ、ヨハネ）の前に、イエスと共に姿を現すということまでやってのける人として描かれています。イエスと並んですごい人。キリスト教の中では、イエスと同じくらいに有名な人物。とてもすごくて、とても有名なのですが、一方でめっちゃひどい人でもあります。あるとき、自分と同じ先祖を持ちながら、異なる信仰を持つ人、特に、その信仰を人々に伝え示す立場にある人たち、宗教者集団と争うことになります。どちらが本当の神を信じているのか決着をつけよう、ということになるのですが、形成は圧倒的にエリヤが不利。ですが、聖書の記すところでは、結果はエリヤの勝ち。エリヤの信じる神が本当の神だ、ということになります。別の神々、エリヤにとっての偽の神々を信じて争った宗教者たちは、エリヤに捕まえられ、皆殺しにされます。その数なんと 800 人以上。エリヤが直接手を下した、とは書かれていないけれども、彼が殺害の首謀者だったことは間違いありません。聖書の記述は、たった 1 節だけで、さらっとそのときの様子が伝えられているのですが（列王上 18:40）、今で言えば大問題。大量殺害。信仰を理由とした虐殺です。この時期、エリヤが活動していた地域は、干ばつが続いていました。誰もが苦しい状況にあるときに、大量殺害をやってのけたエリヤは、まるで何事もなかったかのように、その地の王の前に出向き、干ばつが終わってこれから雨が降ると予告し、実際に雨を降らせます。奇跡を行うということで、ほんとにすごい人なのだけれども、大量殺害に続く行動を見てみると、神の名の下であれば、人の苦しみや命なんて全く気に留めることのない、冷酷無比でひどい人と見なしたくもなります。

形成不利の状況で敵の前に立ち、自分の信じる神を否定する者たちを殺害し、臆することなく王の前に出向いて忠告し、天候を変えるということまで成し遂げるエリヤ。ですが、その勢いは永遠に続くわけではありません。エリヤと敵対していた宗教者たちを養っていた人物、王の妻であるイザベラが、報復のため、エリヤの命を奪うと宣言すると（列王上 19:1-2）、エリヤの態度は一転します。自分の命を狙う者の手の届かない遠くの場所、別の国へと逃亡し、それだけでは満足せずに、人目のつかない洞穴に身を隠したのです。一気に凹みだしたエリヤ。意気消沈。まるで別人。その時のエリヤは、錯乱状態だったのでしょう。何より、言動に一貫性がありません。人の命を奪ったのに、しかも大勢の人たちの命を奪ったのに、自分の命が危機にさらされると一目散に逃げ出します。命が惜しくて逃げたはずなのに、逃亡先で、神に「もうたくさんです。わたしの命を取ってください」（列王上 19:4）と懇願します。さらに 10 節と 14 節に記されている繰り返しのエリヤの言葉。敵が行った殺害については批判するけれど、自分が行った殺害については一切触れていません。また「非常に熱心に」という言葉が綴られていますが、ヘブライ語では「熱心である」という動詞が繰り返し使われていて、自分の行動の卑劣

さを覆い隠し、神のために熱心であったということを必死にアピールしているかのようです。自己正当化、自己防衛。そんなエリヤに対して、神が語りかけます。「エリヤよ、ここで何をしているのか」。

この語りかけ、エリヤの耳にどう響いたのでしょう。また、エリヤに向けられたものとしてこの語りを聞くわたしたちに、どんなメッセージを与えてくれるのでしょう。その意味を紐解くためのヒントが、聖書の記述の中に散りばめられています。まず、「何をしているのか」であって、「なぜここにいるのか」ではないこと。エリヤは神の名によって大きな業をなしたあと命を狙われることになり、疲れ果て、心身共にボロボロになります。そして、逃げました。そのエリヤを、神は否定していません。エリヤが逃げたこと、逃げた先で、誰の目にもつかない洞穴に隠れたことを批判してはいないのです。エリヤの今の状況を否定せず、そのまま受け止めています。そこで語りかける神の言葉は「かすかにささやく声」（列王上　19:12）として届けられています。その直前に、突風が吹き、地震が起こり、火が降り注いでいる（19:11-12）のですが、そのいずれにも神はいなかったと言われています。少し前の場面、18 章において、エリヤが敵対者と争った場面と対比すると、この箇所で「ささやく声」にこそ神の言葉があったということの意義が際立ってきます。18 章では、天からの火が降り注ぎ、それを見て人々は、そこに神がおられると感じています（列王上　18:38-39）。その後に残されたのは、人々の間の、これまで以上の分断でした。エリヤに敵対する者たちの多くが殺され、またその殺害の首謀者であるエリヤも命を狙われることになります。人々の関係性が大きく崩れだしたのです。直接の原因ではないけれど、分断を産み出す一つの要因ともなった天から降る火。本日の場面では、その火に神はいなかったと言われています。人々の間に分断をもたらすようなモノや状況の中に神はいなかったのです。そしてもう一つ、着目すべきこと。神は常にエリヤを気にかけ、エリヤに語りかけています。「ここで何をしているのか」。神からの二度の問い。そして、同じようにエリヤからの、全く同じ言葉で繰り返される二度の応答。ここだけを見ると、両者のやりとりは、変化のないものに見えます。ですが、神の言葉、そして、その言葉を受けてのエリヤの行動に目を向けると、二度のやり取りには大きな違いがあることに気づかされます。一度目のやり取りのあと、神はエリヤに、「洞穴から出てきなさい」と促します。そして洞穴から出たエリヤに再び「ここで何をしているのか」と問いかけます。同じ答えをエリヤからもらったあと、神は、今度は「来た道を引き返し、ダマスコの荒野に向かいなさい」と語りかけます。神の言葉に、そして、エリヤの行動に変化が生まれています。生きた対話相手として、自分との関係の中にエリヤを招き入れた神は、エリヤにとっての新しい命の場、生きる場を提示しているのです。それは、一人閉じ籠っているための場ではなく、人々との関係の中に生きる場です。エリヤが敵対する宗教者たちを殺害したとき、その場面に神の言葉は響いていませんでした。エリヤにとっては、彼らを殺害することは神の意思を貫徹することだったのかもしれません。ですが、

そこに神の言葉がなかったことを考えると、それは、エリヤの思い違いだったとも考えられます。その殺害の前、およびあとの場面で、命を奪うことではなく、命を続けさせることに関心を抱いている神の姿を見れば（列王上 17、19:5-8）、むしろ殺害は神の意思ではなかったと捉える方が妥当だからです。人を殺すということは、とても重く、とても悲惨で、どう解釈したってその残忍さを否定できるものではありません。けれども、この箇所の御言葉に込められた神のメッセージを考えるとき、エリヤによる殺害という事態は、別の文脈に置き換えることができるのではないかと思うのです。それは、共同体における関係性の破れです。人は、関係性が破れ、他者との交わりの中におられなくなったとき、生きている実感を失います。生物学的には命があったとしても、人として生きていない状態。エリヤの殺害は、エリヤをはじめ周囲の人々の関係性が破綻してしまったこと、そして、殺害のあと自分の命が狙われる段階になって逃げ延びた洞穴は、人が共同体を捨てて、他者との関係を排除した状態としてとらえ直すことができるでしょう。洞穴から出るようにと促した神。そこから出て、神の前に、また、人々の前に出るように促した神。神がここで伝え、実現しようとしているのは、関係性の回復です。回復された関係の中に、再びエリヤを生きさせる。そして、その関係の中にこそ、神がいることを、エリヤが、人々が知るようになる。

キリスト教会の歩みは、エリヤの歩みと重なる部分があります。中東の一地方で始められた、ユダヤ教という小さな宗教内部での一運動でしかなかったものが、世界宗教にまで成長していったのです。その力と勢い、すごいとしか言いようがありません。ですが、一方で、人々の間に争いを生じさせ、時に自分たちとは異なる人々を、神の名の下に何千、何万、何十万と殺害する恐ろしさを持ち合わせています。自分たちの過ちに目を向けず、逆に自分たちこそ正義の体現者だ、神の意思をこの世で実現する者だと声高らかに叫ぶことだってあります。形成が逆転すると、身内だけの場所、同質性のとれた場所に閉じ籠って、他者の声を排除し、変わることを、変化を受け入れようとしません。「あなたはここで何をしているのか。」わたしたちが集っている教会。そこで築かれる関係は、一人ひとりが生きていけるものになっているでしょうか。疲れている人、重荷を負っている人のそばにあって、その人たちがそっと留まり、生きる力を養える場となっているでしょうか。動きに満ち、変化に富んだ神の業がなされる場となっているでしょうか。その神の業を、神に与えられる関係に生きることの喜びを、人々に伝えるための場となっているでしょうか。あるいは、自分たちだけのものになり、異なる人を寄せ付けず、そんな人たちに息苦しさを感じさせる場、自分たちの保身のためだけに維持される場になっているのだとしたら。「ここで何をしているのか。」今、わたしたちは、その問いの前に立たされています。自分自身の姿を振り返りながら、神の求める関係にある世界を描き続けながら、必要に応じて、出向き人々と触れ合い、あるいは戻ってきて留まり。これからの一週間、みなさまと共に、その歩みを進めていきたいと願います。